

[資料]

高校生への啓発活動からみる福祉・介護の魅力についての一考察：

－福祉人材確保の可能性を探る－

庄子 幸恵¹⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科基礎看護学専攻

要旨 平成 25 年度に「宮城県福祉・介護人材確保対策事業」の中の「福祉・介護人材参入促進事業」において、宮城県内の高等学校を 11 校訪問し、「福祉・介護職の魅力について」の出前授業を行い、感想文を提出してもらい、内容について質的に検討を行った。高校生は介護について「大変な仕事」というイメージを多く持っており、その一方で介護や福祉について知る機会を持つことで「やりがいのある仕事」というイメージも持っていた。身近で自分にもできる福祉体験を経験することで、「福祉」への興味や、「介護」の仕事への興味・関心が引き出されたのではないかとということが示唆された。福祉や介護の体験を行うことで、介護職への関心も高められた。今後の福祉人材確保に必要なこととして、介護のイメージアップの推進、介護系専門学校や短大、大学への修学支援、給与体系の見直し等が必要であることが示唆された。

【キーワード】 介護福祉、福祉人材確保、災害ボランティア、高校生

I. はじめに

人口減少社会を迎え、今後労働力人口は減少する見通しであり、平成 20 年の労働力人口は約 6,600 万人であったが、平成 37 年には約 5,800～6,300 万人になるものと推計される。介護分野については平成 23 年度の介護職員は約 140 万人であり、平成 37 年には約 213～244 万人の介護職員が必要となる見込みである。このため、引き続き介護分野での人材確保対策を講じていくことが重要である。このような国の方針を受け、宮城県においても平成 21 年度より、「宮城県福祉・介護人材確保対策事業」が実施されている¹⁾。

今回は、平成 25 年度にこの事業の中の「福祉・介護人材参入促進事業」²⁾の中の学校訪問事業において、宮城県内の高等学校を訪問し、「福祉や介護の仕事の魅力について」、の啓発活動を行った。

その活動を通してのこれからの介護人材確保に必要な課題について考察を行った。

II. 目的

高等学校訪問におけるアンケートにより、現在の高校生の福祉に対する関心を調査し、これからの介護人材確保に必要な課題について考察を行うことを目的とする。

III. 方法

以下の内容で、宮城県内における公・私立の高等学校 11 校を訪問し、出前授業を行う形をとり、福祉についての啓発事業を行った。

1) 啓発事業実施者

S 大学介護福祉士養成課程担当教員 4 名

- 2) 対象者：対象学年 2 年生
宮城県内公立高等学校 10 校
宮城県内私立高等学校 1 校
参加生徒総数 1,672 名

3) 期間 平成 25 年 10 月～12 月

4) 出前授業の実際

今回は、出前授業の内容を S 大学で 2011 年東日本大震災後より実施している災害ボランティア活動を通して高校生に福祉への関心を持つような導入部の内容とした。

①授業テーマ：「福祉・介護の仕事の魅力について」

②授業時間：50 分間

③授業目標：今回の授業を受けることで、生徒が福祉について関心を持ち、自己の進路の一つとして考えることができる。

④授業内容

a. 本日の授業の説明(5 分間)

b. 「S 大学災害ボランティア・介護予防教室の実際」の紹介 (DVD 使用：15 分間)

c. 「東日本大震災災害ボランティア活動の実際」の講義 (15 分間)

d. 「介護福祉士の仕事の魅力について」の講話 (10 分間)

e. 生徒からの授業感想の発表 (代表生徒 2 名)

授業終了後に授業の感想について 100 字程度の感想文を記入してもらった。(5 分間)

IV. 分析方法

参加高校生の感想文を精読し、記述されている事柄の意味を教員 4 名で読み取り検討した。それらの記述内容を言葉や文脈を損なわずに抽出してコード化し、各サブカテゴリーとカテゴリーを抽出した。また、得られた結果の客観性を保持するために、教員間の討議により、それぞれのカテゴリーの内容の妥当性を検討した。

V. 倫理的配慮

感想文記入実施前に、協力は自由意志により、

強制されないこと、個人情報保護され、個人名が特定されないこと、内容は成績に反映されないこと、学会発表等で公表することについて、文書と口頭で説明を行い、感想文記入対象者に了承を得た上で実施した。

VI. 結果

講義参加生徒数：1,672 名、感想文回収数 1,543 名、回収率 92.3%であった。

感想文の内容として、5,178 のコードが抽出でき、24 サブカテゴリー、4 カテゴリーが抽出された。(表 1)

1. [介護に対するイメージ]

[介護に対するイメージ] は、9 つのサブカテゴリーからなり、コード数 2,894 件のうち、1,234 件(42.6%) が①「仕事の大変さ・辛さ」、385 件(13.3%)が②「やりがいがある」、154 件(5.3%)が③「人を助ける仕事」、123 件(4.3%)が④「相手と自分が笑顔になれる」、324 件(11.21%) が⑤「高齢者を支える」、77 件(2.7%) が⑥「給料が安い」、32 件(1.1%) が⑦「優しい」、308 件(10.6%) が⑧「色々な人と関われる」、257 件(8.9%) が⑨「家族にも役に立つ」であった。

2. [ボランティア活動に関する関心]

[ボランティア活動に関する関心] は 5 つのサブカテゴリーからなり、コード数 498 件のうち、①「手伝えることがあれば手伝いたい」212 件(42.6%)、②「ボランティアは楽しそう」128 件(25.7%)、③「人を支えることは難しい」76 件(15.3%)、④「ボランティアは継続が大切」38 件(7.6%)、⑤「地域に貢献できる」44 件(8.8%)であった。

3. [介護で大切だと思うこと]

[介護で大切だと思うこと] は、5 つのサブカテ

ゴリーからなり、コード数 734 件のうち、①「相手の良いところを引き出す」220 件 (30.0%)、②「高齢者の気持ちを考える」108 件(14.7%)、③「できるところは自分です」97 件(13.2%)、④「高齢者とのコミュニケーション」188 件(25.6%)、⑤「人との信頼関係」121 件(16.5%)であった。

4. [介護・福祉への関心]

【授業を受けての効果】は5つのサブカテゴリーからなり、コード数 1,052 件のうち、①「福祉や介護のことがよくわかった」766 件(72.8%)、②「介護福祉士に興味を持てた」92 件(8.7%)、③「自分の将来について考えた」128 件(12.2%)、④「自分でも調べてみたい」23 件(2.2%)、⑤「介護職を目指したい」43 件(4.1%)であった。

表1 「福祉・介護の仕事の魅力とは」出前授業における感想文のカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー	数
1. 介護に対するイメージ	①仕事の大変さ・辛さ	1,234
	②やりがいがある	385
	③人を助ける仕事	154
	④相手と自分が笑顔になれる	123
	⑤高齢者を支える	324
	⑥給料が安い	77
	⑦優しい	32
	⑧色々な人と関わられる	308
	⑨家族にも役に立つ	257
2. ボランティア活動に対する関心	①手伝えることがあれば手伝いたい	212
	②ボランティアは楽しそう	128
	③人を支えることは難しい	76
	④ボランティアは継続が大切	38
	⑤地域に貢献できる	44
3. 介護で大切だと思うこと	①相手の良いところを引き出す。	220
	②高齢者の気持ちを考える。	108
	③できるところは自分です	97
	④高齢者とのコミュニケーション	188
	⑤人との信頼関係	121
4. 介護・福祉への関心	①福祉や介護のことがよくわかった	766
	②介護福祉士に興味を持てた	92
	③自分の将来について考えた	128
	④自分でも調べてみたい	23
	⑤介護職を目指したい	43

「出前授業の授業内容」の紹介
 「東日本大震災災害ボランティア活動の実際」の講義内容
 災害ボランティアにおける介護福祉士養成課程学生の特別養護老人ホームでの活動の様子（一部抜粋）

災害復旧・復興支援に向けた
 S大学の取り組み

介護福祉士養成課程の
 学生による施設ボランティア

S大学
 北海道・東北地方で唯一の体育系大学

体育学部	体育学科
	健康福祉学科
	運動学養学科
	スポーツ情報マスメディア学科
	現代武道学科

訪問施設の現状①



施設の現状からニーズを確認
 ～オリエンテーション・事前学習～



災害ボランティア対象地域



出発～学生たちの思い～



清掃活動



レクリエーション活動



リネン交換



コミュニケーション



足浴



「出前授業の授業内容」
「介護の仕事の魅力とは」講義内容
(一部抜粋)



VII. 考察

平成 19 年 6 月に青柳が高校生 660 名に行った介護意識についての調査³⁾によると、高校生は介護の仕事は重要だが、介護は学びたくない、介護職にはつきたくないという学生が多かったという調査結果が出ている。今回の啓発活動での講義では、その高校生からの意見もふまえ、はじめから直接的な「介護」の紹介からではなく、東日本大震災における「災害ボランティア」の実際の紹介から「福祉・介護」について考えることを試みた。

実際に講義を聞いた後のアンケートの高校生の意見からみると、「介護の仕事は大変である」という意見も多く聞かれたが、その一方で、「やりがいがある」、「人を助ける仕事」というプラスの意見も聞かれた。授業の中で、「ボランティア」という福祉の広い活動を紹介することによって、高校生に「自分でもできるかもしれない」「自分もできるところからはじめたい」「ボランティアに興味を持った」といったボランティア活動に関する感想が聞かれた。このことから、身近で自分にもできる福祉体験を経験することで、「福祉」への興味や、「介護」の仕事への興味・関心が引き出されたのではないかということが示唆された。

藤沢⁴⁾によると、介護の仕事に対する高校生の

社会福祉士及び 介護福祉士法(第2条)



「介護福祉士」とは、第42条第1項の登録を受け、介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき**心身の状況に応じた介護**を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと(以下「介護等」という)を業とする者をいう。



意識は、介護に関する職場体験は、体験したことがない生徒よりも体験したことのある生徒の方が介護職希望者の割合が高かったと述べている。そして、職場体験やインターンシップ、ボランティア活動に参加することは、実際の介護現場での体験や人との出会いが高校生の感動や「人の役に立つ」という喜びを生む体験となり、介護職を目指す動機付けになると述べている。文部科学省の中央教育審議会答申⁵⁾においても、ボランティア活動について、小学校、中学校、高等学校と進むにつれて少なくなる傾向があり、初等中等教育段階のすべての青少年に対し、多様な奉仕活動、体験活動の機会が与えられるように学校内外を通じて、質・量共に充実した活動の機会を拡充していく必要があり、小・中・高等学校、専修学校高等課程など、初等中等教育段階の時期における発達段階に応じたふさわしい活動を行うことが重要であると述べている。

しかし、その一方で、上田⁶⁾らは、高校生の進路指導の状況は、介護福祉職を目指す生徒が少ないと述べ、その理由として、介護は厳しいというイメージがあるからだと指摘している。また、実際労働条件について、他の職種と比較すると、介護の労働条件は極めて悪いと述べている。このため、高校の進路指導としても積極的に介護福祉職への進学は勧め難いという指摘もされている。

また、土田⁷⁾は介護現場における人材不足の原因には、介護労働の現場が抱える低賃金、労働環境の悪さ、仕事のやりがいの低さ、介護労働のイメージの悪さ等の要因をあげている。また、もう一方では、介護サービスの利用者の急激な増加という社会構造の変化に介護現場への労働者の供給が追いついていないという側面をあげ、この二つの側面が複雑に入り組んで、介護の人材不足を引き起こしていると述べている。

平成 25 年度老人保健事業推進費等補助金：老人保険健康増進等事業「介護人材確保の推進に関する調査研究事業報告書」⁸⁾では、今後、介護人材確保の取り組みをこれまで以上に進めていくた

めには、介護分野の事業者全体の意識改革や、事業所間の連携も含めた自主的な取り組みが重要であると述べている。そして、介護人材確保に関する取り組みを推進する上での課題と今後の方向性として、①介護の仕事に対するイメージアップの推進、②求職者や大学、高校、専門学校学生向けの修学支援や資格取得の支援、③現場の介護職員に対する研修や表彰制度の導入、④事業者による職場環境や採用活動の改善の支援、⑤介護人材の需給状況の把握と推計、⑥都道府県内の関係部局、また、外の関係機関との協議の場の設置・運営、⑦事業者に対する事業の周知と参加の促進、⑧事業実施のための安定的な財源の確保の八つが必要であると述べている。また、厚生労働省も「福祉・介護人材確保対策等について」⁹⁾で、多様な人材を参入を促進するために、学生や教員に対して福祉・介護の仕事の魅力を伝えるための相談・助言や職場体験の提供を推進している。

このように、できるだけ多くの学生に介護や福祉について体験できる場を提供し、介護や福祉について考えてもらう機会を増やしていくことが、今後の介護人材を増やしていくためには必要であると思われる。今回の学校訪問は今後の進路の方向性を決める時期でもある、高校 2 年生を対象とした。しかし、今後の福祉人材確保のためには、高校生だけではなく、小学生、中学生、大学生に向けても福祉や介護について知ってもらう必要がある。近年の核家族化により実際に祖父母と暮らす若者が減少しており、高齢者について具体的に知る機会が少なくなっているためである。介護は大変な仕事ではあるが、実際にはやりがいのある仕事であることを早い時期に感じてもらい、自己の進路の一方向として考えてもらうためには、早期の福祉体験が今後必要となってくると思われる。できれば生徒の福祉体験について、小中学校の「総合学習」の枠内で体験できることが望ましいと思われる。

VIII.おわりに

近年介護職を目指す若者が減り、宮城県内の介護福祉士養成課程を持つ大学、短期大学、専門学校もその9割以上の学校の介護福祉士養成課程が定員割れを起こしているということから、高等学校訪問事業に取り組んだ。出前授業の感想でも、ほぼ7割の学生が介護は「大変そう」というイメージを持っていた。しかし、授業を聞くことで、「自分でもできるなら、ボランティアに参加してみたい。」という意見が多く聞かれた。実際にこのように福祉に興味をもった学生にボランティア体験ができる受け皿や、高校生であれば、進路指導部の教員と連携し、実際の福祉施設等の見学や、インターンシップができる仕組みを作っていく必要があると思われる。

出前授業ですぐに高校生が介護職を目指すようになるわけではなくとも、少しでも介護に関心を持つことで、自分の進路の一つとして介護や福祉に関心をもち、何らかの形で関わられるようになるために、高等学校訪問事業を継続して行う必要性を強く感じた。

IX. 参考・引用文献

- 1) 厚生労働省：福祉・介護人材確保対策について
www.mhlw.go.jp/.../bunya/.../tannokyuuin_20130311_1.pdf
2013.
- 2) 宮城県「宮城県福祉・介護人材確保対策事業」要綱 2013.
- 3) 青柳育子：高校生の介護意識の実態と課題—高等学校3校のアンケート調査から—。日本生涯教育学会論集 2008;29
- 4) 藤沢緑子：介護の仕事に対する高校生の意識。日本赤十字秋田短期大学紀要 2012;17:23-32
- 5) 文部科学省 中央教育審議会答申 2002;「奉仕活動・体験活動をどのように推進していくのか」
- 6) 上田智子,古橋エツ子,志水暎子他:介護福祉職へのキャリア形成に関する事例研究.名古屋経営短期大学紀要 2012;vol1:73-98
- 7) 土田耕司:福祉現場における介護人材不足の背景.川崎医療短期大学紀要 2010;30 号:41-45
- 8) 平成 25 年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業：介護人材確保の推進に関する調査研究事業報告書 2014.
- 9) 厚生労働省：福祉・介護人材確保対策等について 2009.